

浄土

四月号

特集 仏教・浄土の未来像

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別郵便法)第三五二号
昭和三十八年三月二十五日 印刷 昭和三十八年四月一日



東京都港区赤坂青山南町四十九
浄土宗 梅窓院

電話(四〇〇)一八五

法然上人鑽仰会

待望の書出ず!!

法然上人が現代においてになったら

「選択本願念仏集」を

このようにお説きになるであろう

竹中信常 著

選択集私解

新書版 一二〇頁
定価 一二〇円
送料 三〇円

難解な内容を平易に
若い世代にピッタリ
全浄土宗徒は必らず一冊

施本用に御利用下さい(五部以上送料不用)

発行者 法然上人鑽仰会
発売所 大道社

▶ 仏教保育テスト ◀ めぐみ

指導 大正大学教授 文庫 竹中信常
画 井上孝志夫/萩原弘志/野沢知且

B5版・48ページ 定価 100円・千40円

目次

おやくそく
はなまつり
こいのぼり
おぼん
おひがん
じょうどうえ
ねはえん
ひなまつり
みおしえ
保育テスト

めぐみをうけて
よい子はたづ

多数ご注文にはお割引いたします

発行所 東京都千代田区
飯田町1の21

大道社

TEL <332>5944
振替 東京 8247

浄土

四月号



東京・青山 梅窓院の桜

南無阿弥陀仏、往生の業には
念仏を先とす。

法然上人御法語

—◇目 次◇—

表紙

野の仏(東京・板橋 乗蓮寺)

- 釈尊降誕……………(2)
宗祖 法然上人誕生……………佐藤良智(4)
「浄土」を支えるもの……………村瀬秀雄(6)

特集(その一) 仏教・浄土の未来像

- 未来像をつくるもの……………峰島旭雄(10)
チャーミングな僧侶……………吉田弁空(12)
仏教思想の課題……………田丸徳善(14)
仏教の未来像……………藤井正雄(16)
紀行文 アメリカ旅行⑩……………佐藤治子(18)
御法語をいただく……………(32)
表紙の写真……………(26)
お礼とお知らせ・法然上人讃仰会会則(一部)…(27)
三部経の再発見③……………須藤隆仙(28)
編集後記……………(33)



釈おし尊か降さま誕の
おたんじょう

およそ一人のこの世に生るるは 多くの人の利
益のため 多くの人の幸福きふのため 世間あわれを慰む
がため 人と神との利益のため 幸福のために
であるなり その一人とは誰ぞ これ世尊にて
あるなり

およそ一人のこの世に現わるるは ありがたき
ことなり その一人とは誰ぞ これ世尊にてあ
るなり

四
月
八
日



およそ一人のこの世に生るるは 希有^{けいう}のことに
あるなり その一人とは誰ぞ これ世尊にて
あるなり

およそ一人のこの世を去りて 多くの人の愁^{うれ}い
嘆^{なげ}くことあり その一人とは誰ぞ これ世尊に
てあるなり

およそ一人のこの世に生れたるものにして 最
も勝^{すぐれたもの}者とは誰ぞ これ世尊にてあるなり

およそ一人のこの世に出でて 大いなる眼^{まなこ}とな
り 大いなる光となり 大いなる明^{あかし}となること
あり その一人とは誰ぞ これ世尊にてあるな
り

宗祖
法然上人誕生

西暦一三三年

四月七日

佐藤良智
(大正大学教授)



わたくしどもの心のともしび、くらしの光りである法然上人は今から八百数十年前生まれました。

上人は、今の岡山県、その当時の美作の国に押領使という役人の家に生をうけられたのであります。時に崇徳天皇の長承二年(一一三三)四月七日正午であつたと申されています。大聖釈迦牟尼世尊御誕生日四月八日の前日であります。しばらく伝記作者の伝えるところに耳をかけて頂きたい。

父上はうるまの時国と申され、母上は秦氏(はたうじ)と

よばれた。

子のないことをなげいて夫婦ころを一つにして仏神にいのって、母上が、剃刀をのむと夢み、みもこり給うた。母上はこころやわらかく、ふかく三宝(仏と法と僧)にきえし給うたという。

御生家の西のかたに、よくしげったふたまたの椋(むく)の木がある。その日、紫の雲がたなびき、ま白い幡(はた)が、二流れとびきたってこの木ずえにかかり、天には鈴の音がひびきわたり、はたは日にかがやいた。七日をへると天に再び上ってなくなったという。伝記の作者は次の美しいことばをのこしています。

この木、「星霜かさなりて、かたぶきたふれたれど、異香つねに薫じ、奇瑞（きざい）たゆることなし」と。今日の誕生寺の地であります。後世、上人のゆかりの地に一寺が建立されたのであります。時ありて参詣の機あればひとびと大いなる利益（りやく）を得ることでありましょう。

小児は勢至丸と名づけられた上人の幼名であります。後に出家し、開宗し、わが宗教精神の歴史に偉大な足跡を残されたわが法然上人の御生涯の歴史はここに始まるのであります

わたくしは今上人の偉大なみあとをかきつづろうとはしない。ただ、上人の御生涯の日を讀え、今日尚、一日とその輝きをましてやまない上人の御徳にここからぬかずくのみであります。

上人は御生涯を通じて私共こころ貪しい者のみちびき主でありました。

「烏帽子（えぼし）も着ざる男」、「金剛草履に黒染の衣」の法然上人がいたく私たちの心を打つのであります。上人こそ本当に民衆の人であります。上人に於ける最も特色ある点をあげるとすれば、その民の人であった点であると私は確信するのであります。上人以前の仏教と以後の仏教とに区別すれば、以前の仏教は貴族に主点が置かれたものであります

し、以後の仏教は民を外にしては考えられない仏教に変わって居ります。そしてその重要な役目をなされたのが、法然上人であります。

真理の光りは老いも、若きも、富めるも、貧しきも受けなければなりません。このことは、いついかなる時代にあってもかえることはできません。上人の御ことばをかりれば、「月影のいたらぬ里はない」のであります。月影とは申すまでもなく真理の光りであります。みほとけの光り、あみださまの光りであります。光明はあまねく輝きわたっています。ただこの光りのなかにまっしぐらにうちこんでゆく道を指し示されたのが上人であります。この光りは特に、心まづしきもの、なやめるもの、に強く輝き出でます。

ただひたすらに、真理のみ光りにうちまかしてゆく念仏道こそ民の道であり人の道であります。わら、ぞうりをはいてけわしい人の道を行き給う上人は、今日も尚歩みつづけ給うのであります。私共のあゆむ影によりそうて力強く歩いて居られます。上人は、高く念仏のみはたをかかけて、そのみちしるべを示しつつ、日々歩まれて居られます。昭和の今も。次の時代にもまた歩みつつけられるでしょう。



「浄土」を支えるもの

村瀬 秀雄

「浄土」が創刊されて、早くも三十周年を迎えた。この長い年月の間、政治、経済、思想界と日本のすべてが右に左に大きく激しく揺り動かされた。こうした風波にもまれながら「浄土」は辛抱強く念仏信仰を宣布するために生き抜いてきた。

有志が集って法然上人讃仰会を設立することになったのは昭和九年晩秋であり、その機関誌として「浄土」が創刊されたのは翌十年四月であった。本会が結成されたについては、それだけの時代的背景があったし、また「浄土」が発行されると、またたく間に会員が増加して行った。「浄土」は毎号増刷されたが、入会者の数の方が上廻って配本しきれぬ月さえあった。それなら何故本会の趣旨が、燎原の火の如く全国にゆきわたったのか、その理由をみるにはどうしても当時の社会情勢をみなければならぬ。

世界的経済大恐慌の始ったのは昭和四年であるが、その逼をくって緊縮政策と金解禁を行った浜口首相が暗殺されたのが翌五年であった。昭和六年に満州事変、同七年に五・一五事件、同八年に国際連盟脱退と日本の運命

をゆさぶる大事件が毎年続いた。これらの事件は赤一色に塗りつぶされていた日本を大きく右の方に方向を変えて行った。当然のように左翼陣営に対する弾圧がますます強くなり、「鹽工船」で有名な小林多喜二が獄死したのは同じ八年のことであった。左右両陣営に挟まれて生まれてきたのが、ナンセンス文字であり「不安の文学」であった。天皇機関説が問題となり、団体明徴なる言葉が流行し、軍部の勢力が日増しに顕著になった。そして一方には「文芸復興」が呼号され、芥川賞、直木賞の設立されたのは昭和十年であった。

大事件の続発に従って世相は猫の目のように変ったが、ただ変らぬのは宗教に対する批判であった。例えば「宗教は阿片なり」という言葉が常識でもあるように誰もが口にして疑わず、宗教界は一般から侮りと圧迫を受け通してきた。このように宗教界は左右両陣営の谷間に落ち込んで、両者からの挾撃にあり、いつ陽の当る場所に這い上れるから判らぬ様子であった。

しかしこの世でも中道を受する底流は強いものである。ラジオの宗教放送が機縁とな

って、勃然と「仏教復興」の聲が聞かれ始めた。蔵の中で塵まみれになって映っていたような仏教が、久し振りに取り出され物珍しげに見直された形となった。かすかながらもこんな兆祥のあることを見抜き、機を逸せずにこれを我がものとし、更に拡充せんものとして結成されたのが法然上人讃仰会であった。

会の総師はいうまでもなく真野正順先生であり、仕事の中軸となったのは佐藤賢順先生であった。又直接参加して積極的協力を惜まなかったのは当時の庶務部長里見達雄、教学部長中村弁康、大東出版社社長岩野真雄その他宗門実力者の人々であった。当時四十才という若さの真野先生を中心に結成された同会の意気はまことに旺んであった。それは会の趣旨を述べた文にも片鱗が現われていた。即ち「日本文化の母胎は法然上人の思想と人格である。法然上人を知らずして、日本精神を語ることはできない。日本を語らんとするものは吾等と協同せよ」と強く一般に呼びかけた。

いよいよ「浄土」が発刊されることになって「信仰雜誌浄土」と染めた黄色小旗が用意

され、各書店の軒先にさげられた。この黄色の小旗は大いに注目の的となって、当時の評判となった。

「浄土」は本文八十頁、定価十銭であった。

ただし会費は年額一円であった。この定価と会費は昭和十四年八月に一部十二銭、年額一円二十銭と改正するまで続いた。この価格の低廉さは、市電片道の料金が七銭であったのに較べてもわかることで、表紙に「十セン」とそれを誇示する如く刷り込んだこともあった。会の運営という点からすれば定価十銭は無理であったが、特別会員、維持会員の格別な離金と宗務所の補助金で一切が賄われた。

事務所としては宗務所別館一棟が当られていたが、そこには真野、佐藤両先生を初め多くの同志たちがいつも集り、会の運営、編集について議論を交していた。編集から発送にいたるまでのこと及びすべての仕事は、これら同志たちが手弁当で集ってき行っていた。特に編集については、全員を二分して交換で企画したり、二人宛の幾組かに分れて責任者となったりして、その都度工夫された。

編集の根本方針としては、大衆のための信

仰雑誌にふさわしく、いかにして内容を易しくし大衆性を持たせるかにあった。要するに「浄土」が一冊あれば一家をあげて正しく明るく暮してもらえんことをモットーとした。

従って主人から女中までが読んでもらえるものとするに努力した。最初から信仰相談欄を設けたが、質問が殺到して全部の回答のせきれないのが常であった。また信仰体験談の連載につとめ小説や童話にも力を入れた。まず視覚に訴えるために挿絵のスタッフに苦心した。

毎号執筆した真野正順、中村弁康両先生は別として、佐藤春夫先生が殆んど毎号に原稿を寄せられたことは、創刊早々の「浄土」にとつて百万の味方を得たようなものであった。後になって毎号欠かさず寄稿して下さった吉田絃二郎先生は、昭和十二年七月に明枝夫人を亡くされて以来のことであった。

その他草創の折に寄稿された諸氏の中には次のような有名人が響を列べておられた。即ち井上哲次郎、藤原咲平、富士川游、高村光太郎、十一谷義三郎、中里介山、倉田百三、与謝野晶子、岡本かの子、佐藤惣之助、子母

沢寛、作田高太郎、相馬愛蔵、三木清、中村吉右エ門、松本幸四郎、村社講平等の各氏がおられた。第二卷十一月号は特集して「念仏読本」とした。本文一二八頁で、特価二十銭であったが、会員には例号通りの十銭で頒った。その内容は真野正順、椎尾升匡、矢吹慶輝、大野法道、小西存祐、石井教道、佐藤春夫、松浦一、梅原真隆、江藤英、笹本戒淨、中村弁廉、佐藤賢順その他の諸氏が顔を列べるといふ豪華な執筆陣であった。

第三卷即ち昭和十二年春に真野先生が病床の人となり、「浄土」は大打撃を受けたが、他の同志たちが力を合せて努力したので、会はますます隆盛となった。しかし同じ年に日支事変が始って、国を挙げての戦争という泥沼に突入して行った。昭和十六年十二月八日はいうまでもなく大東亜戦争第一日であるが、この日は丁度「浄土」正月号の再校正を終った日であった。大日本印刷の出張校正室で、部員が帰る仕度をしている時に、例の放送があった。ことの重大なのに驚いた部員は、すぐに、校正刷をとりもどし、一頁分の所感を記し、あわてて組替えを行った。

戦争の激化につれて物資の統制は次第に厳しくなった。中でも洋紙類はますます窮屈になった。洋紙は印刷されたものより白紙の方が高価に売れる等と噂されたのも当時のことであった。洋紙割当会議といっても、出席して割当量を承るのにすぎなかった。各社とも会議の度毎に見えて紙の量が減るので困りきっていた。しかし「浄土」は信仰雑誌として高く評価されていたので、他社に較べてはるかに割よく配給を受けることができた。また取引先の大同洋紙店は並々ならぬ好意を以て便宜をはかってくれた。これまた利益を度外視した信仰の有難さであった。減頁は結局次の配給を減す理由となるので、前金切れ会員への配本をやめ、市販には返本を認めない買きり制をとった。

どこの印刷所も注文が殺到するのに人手の不足に悩まされていた。とくに大日本印刷は政府発注の仕事を多量に背負込んでいた。そのため民間の仕事は遠慮なく断るしか方法がなかった。しかし「浄土」の印刷を最後まで引き受けてくれたのは実に幸いであった。多くの雑誌が統合または廃刊されてゆく中に

あって、「浄土」が生き残ることができたのは、当時の発行部数が一万三千以上であったことが理由の一つであったに相違ない。洋紙と印刷に恵まれたとはいえ、もし部数一万三千以下の雑誌であつたら、こうした幸運に廻り合うことができなかったであろう。

昭和十九年から二十年にかけて米機空襲がますます激しくなった頃、一番困ったのはトラックはもとより大小の運送屋が使用できなくなったことである。築地の倉庫から市ヶ谷の印刷所まで洋紙を運び、製本ができれば芝まで持ち帰るといふ月二回の運搬に八八車を使った。二人の編集員が慣れぬ足腰で大八車を引いたり押したりするのだが、三宅坂という難所には容易ならぬ苦勞をさせられた。地下足袋、脚半という戦時姿は、部員にとって欠かすことのできない実用の服装であった。仕終い頃には発送のため芝郵便局に運ぶのに担架を用いて、幾回となく往復したことがあった。考えてみると、戦災地には雑誌が届かなかったであろうから、事務所を発つのに担架にのせられていたのも妙な因縁であった。こんなことが続く内に、昭和二十年五月事務所

自身も戦災を蒙り、会員名簿等のすべてを焼失してしまった。

「浄土」は創刊号以来、真野先生を中心とする関係者一同の宗祖鑽仰という熱意に支えられて編集されてきた。本部からは会員確保のために各地に出向き、また会員倍加運動と銘打ったこともあった。特に東京には毎月必ず誌友の会を催し、幻燈に座談会に会員相互の交流に努めた。こうした活躍が会を隆盛にした大きな原因であるが、その上に実は支部長の活動が会を大きくする力となった。このことは支部会員が漸増し、全会員の半数以上が支部に属していたことでもわかる。一つの支部において僅かでも会員を殖せば、全体としては大きな数になる道理である。

ある支部長は片手に「浄土」を持って、土地の有力者、有縁の士を訪ねては会員とし、毎月の配本、集金までも自分で行ってくれた。またある支部長は「浄土」輪読会を毎月催してくれた。また支部長は定例の座談会や講演会に必ず「浄土」をテキストにする時間を組み入れてくれた。「浄土」を支えてきて下さったのは、平凡且つ当然のことながら会

員各位であった。そして会員の期待にそうよう努力したが本部あり支部であった。宗門的なまとまりと団結が、本部と支部の働きに花を咲かせもし実らせる素因となった。会は宗門興隆という合言葉によって育ってきた。広告文にはいつも「一寺院一支部」という文字が入れられた。各寺院もまた祖師報恩の微衷を現わすために支部を設立してくれた。宗祖鑽仰のために文書伝通のために「浄土」を活かして利用して下さった支部の増加がこの会を隆盛にし、今まで獲得してくれたのである。

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

在家の方々の為の

村瀬秀雄 著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智 著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町一ノ二二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

佛教・浄土の未来像

法然上人讃仰会の再編成に当り、当誌「浄土」もより以上に進展、発展を期する意味において、次代を担う宗門関係諸氏に、とくに、仏教内部から観た仏教・浄土の未来像を、各専門分野より語っていただきました。これはとりもおさず、「浄土」の進路を明確にするものでもあります。

未来像をつくるもの

峰 島 旭 雄

(大正大学講師)
(早稲田大学)

この一文が本誌にのころは陽春四月、万物の生成発展する季節であろう。万物が生成発展するのとおなじように、ひろくは仏教が、またわが属する浄土宗が、そして具体的には「浄土」誌が、飛躍発展していくことを期待したい。しかし、いたずらなる期待は、その外面のはなやかさにもかかわらず、あだ花にひとしい。期待をいだくにはその前提として、見誤りなき現実の直視がなければならぬ。如実知見がなければならぬ。近代社会科学における

現実分析のきびしさを思いあわすべきである。ひとたび見誤りなき現実の直視がなされれば、次は未来の像をえがき出す構想力の豊かさが求められる。西洋哲学においてカント、フイヒテ、シェリングを問わず、一口に構想力といわれるかかる能力がきわめて重要な役割を果たしていることを、思いあわすべきである。

では、まず現実直視という態度はいかにして養われるであろうか。これをただちに仏教的な修行や観法と結びつける必要はない。いま近代社会科学における現実分析を引き合いに出したように、むしろ宗教とは背反するかにおもわれる科学的態度の育成につとめるのも一方法ではあるまい。具体的にいえば、仏教者の子弟を仏教者に育てあげる

のはもちろん結構であるが、かれらの幾人かを科学者に育てあげることには力をそそぐのである。あるいはまた、仏教関係の学校・大学において科学的教養の培養に重点をおくのである。ニコラウス・クザヌスではないが、そこには案外「反対の一致」ということが見出されるかもしれない。

次に、構想力についてはどうであろうか。構想力はおそらく芸術とふかく結びつくものであろう。あの壮麗な仏教美術を生み出した根本は、宗教的情熱や信仰をしばらくおけば、なによりもまず構想力の偉大さのうちに求められねばなるまい。近時、芸術の創作と鑑賞との二面が決して別個のものでなく、一つであることが強調されているが、その根底にはやはり構想力が働いているのである。ドイツの実存哲学者ハイデガーは、哲学的思惟と創作とは一なるものであると考えている。構想力とはたんなる空想ではなく、芸術を生み出すとともに芸術を鑑賞し、根源において睿智的なものとはなれがたく結びついているものと考へたい。このような構想力を、芸術教育、宗教音楽教育などによって強化する必要がある。

このように未来像の構想をたどるとき、そこには未来像そのものではなくて、かえって未来像をえがくべき人間の問題が現われ、そのような人間の教育・育成ということに

焦点がしぼられる。あるいは人あって、これをとくに仏教的な人間像でないというかもしれない。わたしは意識的に仏教そのものについて語ることを避けてはいるが、しかし、いづれにせよ、かかる人間像がとりたてて仏教的でなくともよいと考える。きわめて大胆な提言をあえてすれば、仏教の将来、浄土宗の未来像について語ることをひとまず括弧にくくり、この現代の時点において、そのようなことどもを語ることの基礎条件として、人間のあり方、人間としてあるべき姿をうそいつわりなく追究する真摯な態度の養成、そのような人間の育成に焦点をあてることが必要なのではあるまいか。それからあとは、そのような若人がほしいままに仏教の将来を語り、浄土宗の未来像をえがくにまかせればよい。それは一つの「敢行」にはちがいない。だが、これまでなんらかの意味で「敢行」でないような宗教があつたであろうか。

会員各位にお願い

1. 会員五名以上で支部をご結成下さい。
2. 支部には、支部拡張用としてお申し込み次第、無料で見本「浄土」をお送りします。
3. 支部には、毎月「浄土」を一冊贈呈致します。

チャーミングな僧侶

吉田 弁 空

(東京・清岸寺住職)

巨大なエネルギーを持つ現代は、組織力によって個人の心を追いつめ破壊しようとしている。人づくりが叫ばれながら、易入門や手相術の本がベストセラーになり、近代ビルの谷間に或は繁華街の片隅で簾竹片手の売卜者に将来を見てもらって居る人々の何と多き事か。レジャー・ブームと云われるが、それもこれも畢竟、組織の歯車となった人間が寸暇に個人個人にもどる事であって、わずかに其処に自分を見出すに過ぎないのだ。不安定ムードが一杯であり浮足だってさえるのも現代の力に抗しきれないからなのだ。

寺院も僧侶も確かに時代に添って変ってきている。又大きく変化しようとして居るし相応していかなければならない。

それ故に、これからの寺院、僧侶のありかたが問題になり、近代化を口にしない僧侶があれば時代遅れも甚しいと

思われる。特に青年僧においては、宗門の全力を挙げて、いや仏教界の総力をもって現代社会の人々を救済しようとする熱意と気力の使命観に燃えていて当然だと思ふ。江田ヴィジョンがマス・コミで問題になれば、仏教界、各宗派の構造改革論が出、人づくりは我々僧侶の手で云う事になるが。未来像を持たない者は時代のバスに乗り遅れた感じになってくると首をかしげたくなってくる。

昨日は去り明日は未だ来なくてどうしようもない。阿弥陀さまの西方極楽浄土に生れたい。御本願の船に乗らせていただきたい。「煩惱具足の凡夫順次往生の道ただ浄土の一門あるのみ」とは思いつつもなかなか御念仏が称えさせていただけないこの頃、他方諸仏国土に勝れた西方浄土のほかに未来像を考えるだけナンセンスだと思う。

時代に相応する事は大切だが、一面逆に背をむけた僧侶が現代社会の人々に望まれていることも確かだ。無為無作の境界を独り静かに守っていき冥想にふける禪僧の姿に心うたれ、千日回峰行をなした僧侶からは、仏家として貴い生き方が感じられる。戒律正しく毎日が別時会のように日課何万遍を称えている僧侶の方が、世間で活動し、世間の人達以上に世間的な心づかいをしている僧侶よりも多くの精神的感化を人々に及ぼしている。最近の仏教雑誌

や新聞にもこのような意見がしばしば見うけられるが、一考も二考もしてよいのではなからうか。

種々の会合に出席して、そこに見られる各寺の住職方は、個性に応じて教義を理解し、葬式仏教と云われようが何と云われようが、それこそ毀譽褒貶何処吹く風と、黙々として自坊の維持運営に涙ぐましい努力を払っている。教化にしても実践面から互の意見を聞きこれを取りかかれ捨てよりよき方向に進ませようとしている。いささか不遜のそしりをまぬがれないが、それぞれがチャーミングな僧侶である。他を引きつける力を持っている。

或る教授から、学生の頃

「君、宗教は人にあるんだ。一言半句の説教をしなくても、心に強く信仰の燈があるならば、その人に接する人々は、そのような人になりたいと思ひ、その人の持つ信仰を得たいと願うものなのだ。教義はその次なんだよ、つまり信仰は人から入っていくものだ。」

と云われた言葉が耳を去らない。同時にこのような人になるのは難中だと思った。

これは宗義や理論大系をおろそかにするのではなくて、信仰を得たい人は先ずその具体的な実践者である僧侶を通して、その教義を知ろうとするのである。

それ故に戒律正しく信仰ともにすぐれた僧侶と、良い意味で人を引きつける力を持ったチャーミングな僧侶の多く出ん事を心から望むのである。

葵 ぐ さ

——御法語の栞り(その二)——

B六版・十六頁
定価十五円 千十円

村瀬秀雄 著

目 次

- 一、自身は凡夫なり(わが身わろして)……………一
- 二、漫心は悪魔に同じ(わがちからにて往生する事ならば)……………四
- 三、念仏に差別なし(あの阿波介も)……………六
- 四、罪人ながら往生す(罪人は罪人ながら)……………八
- 五、生涯弛まむ努力(ある時の給はく、あはれ此度)……………十
- 六、念仏のご利益(およそ五種の嘉誉を)……………十二
- 七、学生と念仏(学生骨となりて)……………十四
- 八、あとがき……………十六

仏教思想の課題

田 丸 徳 善

(大正大学講師
東京大学助手)

仏教が今日いろいろの困難な問題に直面していることは少しでも仏教に心をよせる人びとの、均しく痛感している所であろう。それがもっともはっきり現われているのは、例えば教団とか、それにつながる実践の問題においてである。一方では、新宗教（そのかなりの部分は仏教の流れをひくものではあるが）が栄え、数多くの信者をひきつけている反面、ふるい仏教々団は軒なみに教線の拡張に苦しんでいる。たしかに宗教にとって、信者の多寡は必ずしも第一義的な問題ではないかも知れない。しかし右のような現象は、実はそうした単なる表面的事実だけでない、より重大な意味をもっているのである。

一言でいえば、これは現在、わが国において起りつつある巨大な社会構造の変化に、その原因の大半があると考えられる。よくいわれるように都市化、機械化による大衆社

会の出現は、教団の生存条件を根柢からかえつつあるからである。いままでのように、宗教が単に既成の形式だけによって存立して行ける時代は、過去のものになろうとしている。そしてこれは、ついでに言えばひとりわが国だけの問題ではない。東南アジアのいわゆる小乗仏教諸国においても、従来の前近代的な生活様式を基礎にした仏教は、ひたひたと押しよせる近代化の波に、その土台を洗われようとしている。この近代との対決ということこそ、じつに今日の仏教の当面する最大の課題というべきであろう。この問題をぬきにして、仏教の未来を語ることはできない。

こういうと、教団とか社会とかの外的な面だけに問題があるように聞えるかもしれない。しかしそうではない。それは実はもっと深い内面的な領域——仏教そのものの思想内容にまで及ぶ事柄なのである。なぜなら、もし宗教や思想が生きたものであるならば、それはそのおかれた歴史の場と全く無関係なものではありえないからである。

そしてこの近代化の問題は、直ちにもう一つのひとしく重要な問題につながってくる。東西文化の問題がそれである。いうまでもなく、われわれがいま直面している近代文化はもと西欧に発したものであった。だから、近代と対決することは、或る意味でまた西洋文化ぜんたいと対決する

ことでもある。もちろん西洋文化といっても、詳しくみれば、複雑な内容をもっている。その中には近代の科学文明とともに、西洋の宗教としてのユダヤ・キリスト教の精神伝統が含まれている。この両者は、歴史上の数々の相剋の事実が示すように、互いに異質的でありながら、しかもまた全く切離されたものでもない。仏教はしたがって、近代と直面することによって、同時にまたその背後にある西洋的精神そのものとも、対決しなければならぬ。トインビーもいうように、現代の最大の問題は、自由世界共産圏というような政治的対立よりも、むしろ東西両文化の出会いというより深いレベルでの事件にあり、東洋の宗教としての仏教と、西洋の科学的宗教的伝統との交渉の中にあるのである（この場合、東洋文化がそのまま仏教教的か否かは、また別の問題である）。

それでは、近代と西洋とへの対決に際して、仏教が提示しうるその本来の内容とは何であろうか。すでに多くの先人たちによって指敵されたように、それは鋭い人間性の直視にもとづき、体験と直結した独自の思想であるといえよう。これは、ある意味で、原始仏教からのちの浄土教に至るまで、一貫して流れている仏教の一つの基本的動機であると考えられる。最近しばしば、東洋の特質としてあげら

れる「無」の思想も、こうした基本的立場から生れたものに外ならない。そしてこれは確かに、西洋文化にはないすぐれた遺産である。

しかし他方、そうした仏教本来の思想内容は、そのままの形で今後も価値をもちうるものであろうか。この点についての意見は区々でありうるとしても、おそらくそれは、かなり難しいのではなからうか。今までのべたように、世界的な文化の出会いの時代である現代にあっては、仏教はもと異質的な西洋・近代と真険にとり組まざるをえないのである。とりわけそれは、近代の科学的思惟と、その所産である合理的近代社会との問題をさけることはできない。この問題は、一部でよくなされるように、仏教を「合理的」宗教と性格づけることで解決できるような、安易なものはないからである。

こう考えてくると、仏教の未来は決して安易なものではないように思える。それは、多くの可能性にみちているが、また同時に解決すべき幾多の課題をもたらしものでもある。しかし、これはいわば現代の宿命であって、仏教思想が将来も意味をもち続けるためには、そうした仕事をなおさりにすることはできないのである。

仏教の未来像

藤 井 正 雄

(大正大学大学院)

仏教の未来像、これはすでに多くの人によって論じられた課題であり、かつ将来とも論ぜられるべきものである。しかし、限られた紙面でかかる大問題を論ずるにはあまりにも僭越であるので、その手がかりとして今までに行なわれた種々の寺院調査の成果および私自身の考えの一端とをあわせて、現実の動態を眺めてみよう。

X X X X X

仏教寺院全般についていえることではあるが、その全国分布図からわかることは、寺院分布の地域的偏重である。

主要宗派寺院は一平方キロメートルあたり〇・九、一千人あたり〇・七七カ寺の割合で分布している。愛知、京都などは両比率がいずれも高く寺院の多い府県であるが、北海道、青森、岩手、秋田、高知、宮崎、鹿児島などは両比率がいずれも平均以下で、寺院の少ない地域である。これに

対し、たとえば東京は面積比からすると一・二六と寺院密集地域であるが、人口比からすると〇・三二ときわめて稀薄地域となる。このような地域は東京の他、大阪、神奈川、福岡などのいわゆる都会地区である。

以上のように表面的に眺めただけでも、地域性がみられ、それぞれ社会的、文化的、経済的条件を異にするので、簡単に論ずることはきわめて危険であるといわなければならない。

したがって、ここでは上述の全体的な脈絡のもとに一般的な傾向を列挙してみたい。

X X X X X

☆寺院が各地域に均等に分布していないことは、地域社会を背景とする宗教的性格を弱めている。

☆戦後、宗教法人法の施行に伴って本末関係が弱体化している。

☆このタテの線の細いことは、包括法人としての宗門を寺院の連合体とし、本山や宗務所が教団組織の適確な現状分析に欠け、遠隔な地方の末端寺院にまで寺門経営・教化の指導面を不徹底なものとしている。さらに、

これは愛宗護法の念を稀薄化する一因でもある。

☆個々の寺院をつなぐヨコの線は、葬式・法要以外のなものでもない。↓ただし、最近組合的運動も盛んになり

つつある。

☆檀信徒との結びつきは、全般的にみて五〇才以上の地域
的有名者による総代・世話人を通じてなされる。これは
金光教や天理教などの教派神道が中年の経済力のある旧
中間層、新興宗教が未組織労働者や中小企業者などの青
年層と結びついていることに對比し得る仏教の老年性を
指す。

☆経済的基盤が弱い。葬式、法要の収入が寺院収入の七割
を占める。ごく僅かな寺院を除き住職専業寺院の生活は
豊かでなく、兼業寺院が五割強と推定される。寺院をし
て葬式、法要の儀礼執行場とさせている。

☆教化活動は全体的に低調である。広大な境内地、建物を
有する寺院で、幼稚園、保育所などの施設をもつものは
少なく、まだ活用の余地を残している。仏教青年会、仏
教婦人会、日曜学校の開設も不活発である。茶、花、ソ
ロバン塾など行なっている、主として経済面からの要

求が強く、真の教化活動となっていないくらいがある。

× × × × × × ×

以上は、組織、経営、教化の一面であるが、農村では慣
習、人間関係の支配を受けて閉鎖的で、都会地では人口移
動、工業化の社会的流動性の激しいために伝統的な家を基
盤とした結びつきが次第に関心・機能的な結びつきに変わ
りつつあり、現況の把握が不十分で、檀信徒・一般市民との
結びつきを稀薄化している。住職に高令者が多いことも現
況の把握を困難にしている要因でもある。

先に述べたように、寺院の発展は本末関係、寺檀組織・
講の三者の脈絡で決定されるがこれは現況の把握なしには
できない。地域性を考え、各寺院は独自の方針で進んで地
域社会のコミュニティ・センターとなるべく努力すべきで
あろう。社会の要請に応えるのが仏教の未来像であって、
歴史の流れとともに新しく進んでいくものである。

じょう ど
「浄土」

で

い
生きる

き ょ う
今 日

と

あ す
明 日

アメリカ旅行

《10》

佐藤 治子



碧。アメリカで一番大きいもの

スカイラインとブルーブリッジ

ノースカロライナ州の山又山の頂上近くをドライブウェイが続いている。コースの長さは一二五〇マイル(約五百里)もあると云う。カーブする度にどこまで続くかと思われる平野と遠山の景色をみながら殆んど一日を山の嶺つづきにドライブして行く。この日は十一時間四百マイル(百六十里)を走った。一夜を麓の小さい町へ泊り翌日又ブルー・ブリッジ・パークウェイの続きを走る。そして東部で一番高い山マウント・ミッチェルへ登った。海拔六六四八フィート、富士山が一万二千四六七フィートとすると約半分と四五〇フィート足した高さである。

この山一つだけ富士山のように一段と高くそびえているわけでなく連山の中で頂上が他の山々より高いわけであるから、このドライブウェイがどんなに高い山々を走っているか想像し難い事である。パークをする所で車を降りた時は列風に息がつまってしまうかと苦しい。他の車の中にはとても登る事はとあきらめた婦人達が、日本着物で降りたつた私、風に

一生けん命で抗している私をみている。ハイヒールでおしゃれをしていた婦人の三四名は、車を下りたものの、あきらめて車へ戻ってしまった。マリオンに付きそわれゆっくりと歩るいて行く。近い所ではあるが胸つき八丁である急坂を登る時の用意に心臓の調子をととのえる為である。じめじめとした灌木の木の下道を一步一步登る。呼吸がだんだん早くなって来る。「苦しい?」と私の顔をのぞき込むマリオンに、「大丈夫」とえらそうな事を云ったものの事実苦しかった。ここまで来てあきらめるなんてと自分で呼吸をととのえたとのえ登って行く。おりて来る人にすれあうと羨ましくなった。ようやくにして頂上へ着く。一休みしてコンクリートの四角い展望台へ登る。急な階段がぐるぐる廻って造られてあるのをみてがっかりした。又登るのかと、ハアハアし乍ら登って行く。

やれやれ頂上へついた。一步外へ足をふみ出したとたん呼吸が止まるかと思う位の烈風が吹きまくっている。ショールで風をさえぎる様にして一廻りする。マリオンは髪が乱れるのも気にせずパチパチとスライドをと

っている。私の写真を一枚とると私は風の中へ立たせる。苦しさを忘れていかにも嬉しそうにニコッとした顔をしてみせた。そして急いで元の階段の入口へと飛び込んでしまった。アルプスの山を踏破でもしたような得意な気持を味わったのはこの烈風の吹く頂上であった。苦しくて来てよかったと思わざるを得ない。

得意な顔をして車へのりこんだ時はやれやれとほっとしたものである。もし傾れてもしたらと緊張していた気持が一度にほぐれて行く。そしてシャクナゲのしげみを道のわきにみ乍ら（六月頃が一番きれいだそうである）はるか下には湖水が見え出した。丁度長尾峠のトンネルを出て芦の湖が見えるあの景色に似ていたが、ブルー・ブリッジ・パークウェイではもっともっと下にみえていた。

ハイウェイは幾折も曲り乍らぐんぐんと下ってアツシビルに入った。この日の中にノーナコロライナの南部のシャロットで私達を待っている友人の所まで行かなくてはならない。再び曲折の多い森林の中の道路わきでリノゴを売っている屋台店をみ乍ら走る。暫く

すると平野に出る。綿畠が見え出した。私は低い草のような木に白く綿がはじけているのを初めてみた。黒人の男女の労働者の姿があちこちにみえる。これからはいいよ南部の黒人達の生活にふれることになるわけである

黒人問題と全学連

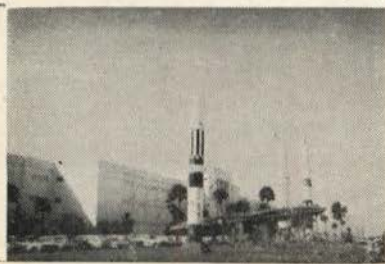
見渡す限りの綿畠の中を車は一路シャロットへ向かう。町へ入る前に軒のかたむいた家々が並んでいる部落を通る。うすぎたないてすりにもたれ、五六人黒人の若者がのっそりとかたまってボソボソ話をしている格好は薄気味わるい。私達を待っているミセス・ブルの家はどこかしらといささか一部落ではあったが、このカラード・ビーブルのいるあたりを通る時早く通り抜きたい気持にかられた。

やうやく青々とした芝庭をもつ住宅街を出てはっとする。黒人問題はアメリカにとり大きな問題である事は新聞でもよくよんでいた事として知ってはいたはずである。まして南部へ足をふみ入れればこの問題が大きく浮び上って来る事は致し方ない。ミセス・ブルの広い客間でくつろいだ私達はその夜十四人の

婦人達と食事をすると言う計画を話された。シャロットはノース・カロライナ州の大きな都市でサウス・カロライナ州に近い。ここで一番大きいホテルでディナーを頂いた。ホテルでのディナーがすむとブルさんの家へ皆ついて来られた。ゆっくり私をかこんで話をしようと言うのである。

あとでできると、ホステス役の婦人は南部特有のハイクラス気分をもった方らしい。言葉も私にはよく分らぬ南部のアクセントがある。マリオンがわかりやすく通やくしてくれ

る。きつと日本の婦人が誰でも出来るあたりの人は考えている生花かお茶の流儀の事をきか



ケーブカナベラの近くの米軍基地

事であった。大たい黒人の事にはふれたがらないと兼々きいていたのに、日本人の私がいなくてもかまわないというのは時代の流れがそうさせるのかしら。全学連も「センガクレン」と日本語で通っている。黒人問題はそれぞれが話している事だから私は分ったような分らないような顔をしていた。全学連の事も私が云った事が日本人全体の意見としてとられたら迷惑するのは日本人の人達である。私は一時間やそこいらで片づけられる問題でないし、その前後に（ハガチー氏到着の時クローズ・アップされた事なので）岸内閣に対する国民の考え等にも及ぶ事なのでこう云うところで語るには問題が私にはむずかしい。私の意見はあくまで私個人の意見であると一応ねんを押す事を忘れなかった。

この問題はさておき私は意外な事が話題になったのでおどろいた。外交官や社交界ならこう云う政治的にふれる問題はディナーの後に出すべきでないかも知れない。けれど日本人の一人と夕食を共にしたこの一時間余りをその人達の心にかかっている問題を取り出した事はかた苦しいマナーや社交的の話題

で「大変今夜は楽しんでございまして」と云うよりは卒直でよいと思った。下手な理くつをのべないでよかった。と云うのはあとから私がこの町を訪問し、その夜のプール宅での会合を話

そうとしている私の横顔がいつのまにか写真にうつされ新聞にのっていたのを送ってくれておどろいてしまった。有力の婦人達とはきいていたが新聞記者らしい人はいなかったから婦人の記事に誰かがのせたのかも知れないそう云えばマリオンと私は肩書は何であろうかときかれた時笑っているマリオンの事は私が説明をした。私の事は「そんな肩書なんてありませんよ。一家庭の主婦にすぎませんよ」と云った所「とんでもない」とマリオンがその人に何かつけ加へていたので、あちらの人は肩



マイアミの街路樹の林。車中より

書を重要視するのかしら位も思はなかった。ちゃんとプールさんより紹介はされていたらしいけれど念を押したかったのは新聞を出す為だったらしい。南部の一都市シャロットに行く日本人は珍らしかつたにちがいないと考えてみるとフロリダ一周を終りワシントンへ戻るまで日本人には一人も会わなかった事を考え合わせると珍らしい訪問者であったにちがいない。昨年の秋の新聞にぎわせた黒人の大学入学問題でさわいだ時黒人に対しきびしい態度をもちつづけている南部の州の中にこのあたりが入っていたので、黒人の問題をとり上げるのは致し方ない事である。

十七日朝九時名残を惜しむプールさんと別れ一路南下する。山など全然見えず遙か遠くまで続く綿島の中の国道二十一号線を走る。サウス・カロライナに入ると赤土がかわき切った地肌をみせ南を指して走る車のフロントガラスからさしこむ日はあつい。一望の綿島に黒人の家族らしい一団が働いている姿があらにもこちらにもみえる。小さな町へさしかかる。町のはづれの道はたで一人で何かむしゃむしゃと喰べている年よりの黒人や平家

建のみすばらしい軒なみのつづいてゐる黑人達の前で労働者風の人達がまひるの目を受け五六人立話をしてゐるのを見ながら過ぎる。学校があるらしく黑人の子供達が通りをわいわいさわぎ乍ら歩いているのもみかける。畠で働らいている黑人達をみる時はさらにとみて過ぎる事が出来たが職もないのか電柱の近くでボツンと一人立っていたり、立話をしてゐる一群の黑人達をみると心が暗くなる。

だんだんと綿畠から美しい牧草地帯へ入って来た。一時半頃であつたかしら、もうジョージア州へ入つたのである。車の後の窓より走って来た道をふりかえると一本の広い国道がまつすぐに見える。或る時は丘となり、平地となり南部のあつい日ざしの中をたんとんと南北につづくこの道はジョージア州の本部を走る三〇一号線である。あの牧場よりノソと出て来る牛の行列をあやうくぶつかりそうになったのはこの道の丘を出たあたりであつた。南へ下るにしたがつて並木もうっそうとして来て緑もすがすがしい色に変わつて来た。大きな休けい所の様な所が見えて来た道路の正面にウエルカム・フロリダとかいてあ

るこれからがフロリダ州なのである。

道路の右側のフロリダ州への入口にあるきれいな休けい所前で車を止め中へ入つてみた。「ようこそフロリダへいらっしゃいまして」と若い婦人が奥のスタンドの向うからはえんでいた。ここでそれこそ新鮮なオレンジ・ジュースをのんだ。長いドライブ、暑さと担々とした一本道、黒人部落を心を暗くして通つて来た私には緑したたるフリダロ州を目の前にみてのむジュースの美味しかった事。あの味はフロリダ州独特の味の由。二人

は一息にのんでしまつた。スパニッシュ・モス（木にかかり風にふかれてゐる苔の一種）があちこちに見え出した。ジャクリンビルと云う大きな町を通り抜け大西洋に面した古い都市セン



セブンスマイル・ブリッジ

ト・オーガスチンへついたのは夕方であつた。四五〇マイル（百八十里）を走つたのである。

カラード・ビープル（続）

フロリダはグレープ・フルーツの産地で大きな樹に一樣に色づき始めた実がついてゐる。オレンジも冷凍にして北部へ運ばれて行く。苗木を育てている畠から大樹となつたグレープ・フルーツの畠は広々とした平野をおつてゐる。取入れるはきつとカラード・ビープルが働くにちがいない。フロリダを一周してから帰途は国道十七号線を大西洋沿いに北へ向け走る。見るべき所もなく並木にかかつて風にゆれてゐるスパニッシュ・モスが又割合に多いのをきれいだなと眺める位。ニグロの部落を通りすぎると木立のわきにスクールバスが二台と古くなつた車が二台程止まつてゐる。黒人の夫婦子供達が幾組もそのまわりにいる。ニグロの人達は職を探し転々と南部あちこちを移動して行くのだそうだ。荷物を積みこんだり忙しいそうな大人のまわりで小供達がさわいで遊んでいる。白人の人口よりも生めよふやせよで、増す一方の黒人は

アメリカにとって色々の問題があるらしい。

白人と黒人の共学とか差別待遇の問題はとり上げる気持はないけれど、ドライブ旅行中に黒人部落を通り、綿昌で働らいている黒人の家族や、小学校へ通う子供達とんだりはねたり子供らしい楽しさを味わっているのを見る。又一方道ばたで一人でムシムシや何か喰べていたり、七八人よたっているのをみ、又この移動部隊をみた私は、事が田舎道を走っている間、南北戦争が何故起ったかなどマリオンと話し合った。今更それをくりかへす事のは無いけれど、共学問題で日本の新聞にまでかかれる位の大問題が多く南部諸州に於て起る事であり、その諸州の中に含まれるジョージヤ、サウス・カロライナの二州はフロリダ州への一周旅行の往復に私達は通ったわけである。そして多くの黒人部落を、学校を、そして黒人達をみて来たわけである。北部に職をもち居住している黒人の人達は南北戦争が終つてから差別しない事になつてゐるから現在も差別されてゐないようである。私は大分前にこんな事をきいた事がある。それは、黒人に自由を得させる為南北が争そ

つただけれど、自由の身となつてから職を離れ、住居を失う結果になり平和に暮せる黒人達を除いて南部に多くいる不幸な黒人の為に、むしろ自由にさせなかつた方が彼等にとり幸せであつたのではなからうかと云う意見である。ほう大な土地を持つ富裕な白人にとり忠実な使用人は必要である。そして南部出身の私の友人の祖先は思いやりがあり、黒人の使用人を大切にし、学校教育まで受けて時々その家族の所へ来ると云う。黒人の中でも大学の教授、弁護士、或はよい職業についている人は多い。マリオンとワシントンの郊外でガソリンを買つた時、そのスタンドは全部黒人の人達ばかりで私達の車を扱つた人は丁寧な真面目な人であつた。ホワイト・ハウスの玄関で戸を開けたてする人も黒人であつた。ホワイト・ハウスに働く位であるから実に態度など丁寧で私には印象に残つた顔である。

一方、汽車の御不浄をあと人が入れぬ位よごしてしまつたり、故意に横断の邪まをした人りした人も私も事実みることがある。

どこの国にも親切な人ばかりはいない。南部の人の一部にぎやく待をした人があり北部

へに行つた一部の黒人達の事から南北戦争の導火点に火がつけられたと云う約百年前の戦争の余波は他国との戦争でないだけに、しかも、現在人口に於て白人よりふえて行く一方のこの黒人の問題は第三者の口を出すべき事でない。日本人すらおみそ汁とお醬油がしみこんでいて戦前には日本人に部屋をかすのをいやがった人がいたと云う。何か生理的に生活様式の差から来る何かがあるかも知れない。私は通りすがりにみた黒人の子供の笑顔などみて、又生れた赤ちゃんをみて、運命の皮肉さを味わわすはいられた。どうして私はこう黒いのだろうとしゃほんをこすりつけて一生けん命洗つたと云う話を昔よんだけれど、生れてよりの黒い膚の色。白人の赤ちゃんをみ、黒人の子供をみる度に、生れて来る子には何の差別もないのにと悲しまずにはいられた。

ワシントンはカラード・ピーブルの数は白人より多いとか云われている。住宅地もきちんとして裕福らしい。日曜日とて教会へ行く子供や学生達の洋服もきれいにきかざつていた或る夜元提督に夕食に招かれた。御宅へつ

メキシコ海軍写真をとっている人はマリオン



いたのが少し早かったので車の中で少し待っていた。そこへ立派な車がついた。お客様かしらと灯を消してあるこちらの車から見てみると黒人の一婦人がスタスタとスーツケースをさげて入って行った。「まあまあ新車ね」とマリオンは云う。やがて約束の時間になったので私は車を降り、その御宅のベルを押した。ドアが明けられ出迎えたのは今さっき新車でとりつけて道のわきに車をおいてあの黒人の婦人が白いエプロンをかけインスタントメイドさんになったわけで私はおどろいてしまった。女中

食堂へ、或いは食後のお茶等はこのメイドさんがなれ切ったものこして働らくのをみたわけである。私が豪華な衣装を着て歩いている黒人の婦人達をニューヨーク市内で見て感じた事は色に対する感覚は少し変なのではなにかしらと思うほど実にきつい色のものを選んでいる事である。

さんをやとわな
いで暮している
人達は大きな会
などする時そう
して臨時にやと
えるわけであ
る。十四五人の
その夜のお客様
の接待は勿論提
督夫妻であるけ
れどお台所から

南部の町で見たよいみなりをしていた女学生位の女の子達も又同じであった。私に強く印象づけたものは青い帽子に紫のコート、そして赤い靴をはいていた黒人のレディーであった。実に異様に私に感じられたのである。色のセンスは無いのかしらと思わざるを得なかった。アナボリスの海軍兵学校は優秀な頭脳的主でなければ入学出来ない。そのアナボリスで黒人の一士官のシャンとして歩いている姿を私はみたのである。大学の教授、弁護士等の要職についている黒人の人達も沢

用事だけ確実にすると云える。けれど冷蔵庫に残っていたはずの物はいつの間にか「あまり沢山あると喰べ切れないでしょうからもうって行きます」と勝手に家族の為に無断でもって行ってしまうとその方は話された。そしてみると忠実な働き方とは云えなくなる。エリザベスがやとうメイドさんは中々よいらしい。そうしてみると南部より北部へ来てしまった黒人達の方が白人の人達と調和して生活出来る素質をもっているのかもしれない。

例えばニューヨークに住むには市民として税を納めなくてはならない。移住して来た黒人達にはそれ相当の仕事があつて収入があればこそ北部に住みつけるわけである。では一般の南部の黒人は？と云って考えて行くと政治的に沢山の問題があるわけである。日本で考えているより深刻、複雑で、簡単に批判する問題ではないと密々と思わざるを得ない。

著

フロリダ州のセント・オーガスチンは私の旅行中沢山よい所好きな所として心に残った所の一つである。「城」と云うものは私の聞

フロリダ州のセント・オーガスチンは私の旅行中沢山よい所好きな所として心に残った所の一つである。「城」と云うものは私の聞

いた或は見た限りに於て全然ない。フロリダの東部で砦があつと云うおもかげを残しているかこいを二三ヶ所で見ることが出来たが、セント・オーガスチンの砦は中々立派であつた。一泊した朝、堀りにかこまれた砦のかこいの所まで行つて見た。一六七二年にスペインが南部殊にフロリダを占領している頃英軍或は仏軍からこの地を守る為につくられたもので八四年間もかかつてスペイン人やインディアンを動員し作つたものだそうである。一八二一年にアメリカ領になつてから当時の英雄サンタマルコのモニュメントとして史跡保存となり現在に至っている。イギリス軍と戦いスペイン人はこの砦の中に入つてしまひ引橋を引いてたてこもつたと云う引橋が鉄のくさりでおろされている。古い映画によく出るスカートの長い洋服をきた女の人達をふと思ひ出し乍らその引橋に立つてみた。

スペインが昔領土とし開たくしていった西部にもサンタバーバラとかサンタマリアと云つた名前がついている所がある。一七九三年から四年もかかつて建てられた教会とか宿やとか古い建物が今でも残っている。アメリカ

東部を北から南へと旅行する間に独立戦争と南北戦争の戦場の古跡そしてこの砦とを見学出来たのである。次男からの手紙に「友達とスコットランドにあるお城をみに行こうとしていたら外国人が寄つて来て『フォートへはどう行けばよいか』とたずねた。『城をフォート（砦）と云う所をみるとアメリカ人にちがいない。我々もフォートへ行こうじゃないか』と笑ひ乍ら出かけた云々」とかいてあつたのを思い出す。家の者にはピンと来なかつたかも知れないけれど、その砦をいくつも見学出来て記憶も新しい私は、その一文に「ハバーンなるほどね」と一人でその意味がうなづけ思わずほはえんだのであつた。

マイアミ

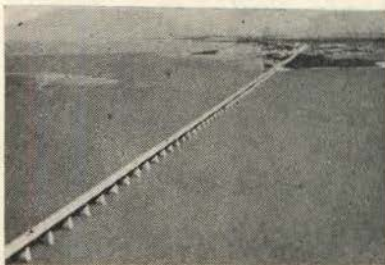
大西洋岸を一路南へ南へと向ひミサイル発射で有名なケープカナベラへ行く。橋を渡り細長く南北にのびた半島へ入つて北へ向け走る。所々に海軍の将校や水兵達を見乍ら衛兵のいる所まで行つてみた。ミサイル発射の時は今走つて来た向う岸一帯は車と人とうずまると云う。これよりは入つてはいけな

標示のある所で
ターンして再び
橋を渡り暑い日
射しを受けつつ
マイアミへと向
う。

途中ものすご
いスコールにぶ
つかつてしまつ
た。あんな豪雨
は初めてであつ
た。黒雲におお

われヘッドライトをつけ車を徐行。あたりの全部をたたきつけるかのような激しい土砂ぶりにとうとう車を道路のわきによせとめてしまった。前後に二三台皆待避している。

二十分位たつと小降りとなり、南国らしい青空が見え出した両側に待避していた車は一台づつ動き出した。生れて初めて出会ったスコールの激しさであつた。翌日マイアミの海岸をみる為にホテルを出発。テレビでよく見るあの豪華なホテルの立並ぶ通りを走る。車窓より見える街々にズングリと太った背もあま



メキシコ湾と大西洋にかか
るペン・マイル・ブリッジの
一部

り高くない夫婦づれを幾組もみる。皆夏服で街を歩んでいる。十月半ば過ぎて日本ではそして北部のアメリカでは落葉している頃である。「マリオンどうしてこの辺にいるアメリカの人達はこう太って北部で見る人達とちがうのかしら」と思はず口に出してしまうほど人種がちがうのである。なるほどちがうわけである。ユダヤ系の人達がお金が出来るとマイアミへ一月位滞在してマイアミへ行ってきた事が一つの自慢になるらしい。私に変な質問をさせてしまうほど偶然に街に見る人達の姿がちがっていたのである。

さて行けども行けども海岸への入口はみつからない。マイアミ・ビーチの美しい砂浜へ降り立たせたかったマリオンは、がっかりしている。デラックスなホテルの客にならなければ海岸へ出ることは出来ないやうにホテルホテルで一杯である。勿論白人の人達もシーズンには来る所で丁度私達は避寒には未だ早いシーズン・オフにマイアミへ来たわけなのでせいたく白人達はあまりみかけなかった老後をこの寒さ知らずな所へ来て住む白人達そして商売をするユダヤ系の人達もいる。



ネブルスの住宅街、コナツツと筆者

日射しの強いマイアミの町並には白いビルディングが立ち並びヤシが風に吹かれていく。デラックスな気分を味わいたい人は行ってみる所。私には一向面白くもない所と印象づけられてしまった。

キイウエスト

アメリカ東部の最南端、メキシコ湾につき出た細長い半島へさしかかる。フロント・グラスより射し込む日射しに手はあかがね色に日焼してしまった。葎のかけにたとえ様のないすばらしい青さの海が見え出した。

この海は天候がわるいと、この色はみられないそうで、いわゆるエメラルド・グリーン

である。フロリダ湾と太西洋にはさまれ兩岸にヒタヒタと小波がよせている。セブンマイル・ブリッジと名をつけられた七哩の橋。時速百キロから百十キロで七分、かえりには十分かかって渡った。所々橋の上からつり竿をたらしめている夫婦づれがいる。三年前フロリダをおそった台風の為ヤシの大樹が何本も倒れている。嵐の時は波も半島を越してしまうせいか所々にあるホテルや家々も床が高く建てられている。こんな所で雨風にあつたらと思うと早く半島から出てしまいたくなる。一時間かかって細々と続く半島を出てタミアミトレイルと云うジャングル地帯を抜け西海岸へ行く道へ入る。

マイアミと西部のタムパをつなぎ「タミアミトレイル」と云うらしい。雲を山と考えられる程白雲のモクモクとした形をみると山かと錯覚をおこす。沼とヤシ、杉の様な並木がつづく五十里の一本道をひた走りに走る。インディアン部落をいくつか通り過ぎ、沼におり立っている白さをみ乍ら西へ西へと急ぐ。山のやうな雲に夕日が映りその美しい色。色は刻々とほかって行く。マリオンはメ

キシコ湾に沈む夕日の雄大さをみせたいと濃
いアケボノ色にそまつている空をあかず眺め
ている私と話もせずひた走りに急いでいる。

すばらしいホテルをみつのお魚専門のお料
理屋へ入った時、あちこちのテーブルで「ど
この国の人」とときく婦人達の声がきこえる。

表紙の写真

東京・板橋 乗蓮寺境内

み仏は実に身近かに生きている。ただ人間
の愚かさがそれを知らずに摸索しているに過
ぎない。このことを、表紙のみ仏が教えてく
れている。大和路や洛中を、または若宮大路
の近辺を散策して、芸術味溢れる建築・彫刻
を鑑賞し、その素晴らしさに圧倒される人は多
いが、名も無き膝下の埋もれた美しさに目を
とどめる余裕を待ち合わせない。それも芸術
という名におぼれている私たちの愚かさにほ
かならない。

このみ仏は誰が作ったか判るわけもなく、
亡きとし児の冥福を、やさしかりし母親の
追善にと頼まれた石工の手に成ったものでは
ある。石工も自分の親しい人々のなから、顔
をかりてみ仏を刻んだことであろう。言いか

「日本の人」と男の人達がささやいている。

店の女主人がわざわざテーブルまで来てえび
が日本のテンブラのように美味しいと云った
私に挨拶をしてくれた。日本の着物を知らな
い女の人がいる位、ここまで来る人は珍らし
いにちがいない。食後海岸へ行ってみる。メ

えれば、み仏と私たちとの顔とが一つになっ
た世界が開けていることになる。今までは路
傍の石と同じように無縁と思われたみ仏が、
私たちの祖先の顔と重っていることに気がつ
けば、言いようのない親しみが湧いてさえく
る。自分の周辺のお地藏様を、付近のお寺の
追善供養仏を見直してみれば、苦むした衣裳
を着ながら、確かに私たちに微笑みを返して
くれる。ともに泣き、ともに笑い、ともに語
らいかけてくる。身近かなみ仏に気づかせて
くれた作者に改めて感謝の意を表したい。し
かも、写真のみ仏は何かに聴き入り、何かを
考えておられるようである。

このたえがたくさびしい荒野で
海はこうこうと空に鳴り

大海嘯の遠く押しよせてくるひびきがきこ
える

キシコ湾上にかがやいているお月様。アーと

ためいきが出てしまった。誰がこの遠いメキ
シコ湾に臨むネーブルスへ来てヤシの木の間
ぶ砂浜に立ちお月様を眺める事が出来ると考
へられたであろうか。忘れられぬ一日であり
一夜であった。

君の耳はそれを聴くか？

久遠のひと 仏陀よ

「仏陀」より

萩原朝太郎

眠っているような路傍の石と同じように坐
っているみ仏。だが愚かな人間の訴えを聞き
ながら、につこりはえみ永遠に生き続けて
いるみ仏。朝太郎ならずとも私もこのみ仏の
気持を知りたい。なんと愚かな願いではない
か。だが私はここで大いなる邂逅をえた。話
しても答えてはくれないが、私の脳裡にきざ
まれたこのみ仏は私と一語になつてどこかで
生きていてくれるに違いない。芸術味豊かな
み仏が全てのみ仏ではない。自分の家の中にも
み仏が生きているはずである。まさに、み
仏は身近かで生き続けておられる。

(石上善庵)

お礼とお知らせ

思えば、昭和十年本会が結成され、法然上人のみ教を現代に実践し、遺徳鑽仰のともしびをかかげてより、早二十有八年の歳月を経過いたしました。その間、会員皆様の熱烈なる御支援を賜り、所期の目的を果しつつ今日迄歩んでまいりました。

感慨あらたに、深い感謝をまことにささげます。

また、去る昭和三十六年には、法然上人七百五十年御忌を迎え、いくたの記念事業を完遂し、宗祖の慈恩に奉酬いたしました。

しかし、現実において、法然上人鑽仰運動が、もっと力強く推進されるためには、さらに各位の一層の御尽力を仰がねばなりませんので、ここに、次のように本会創立の趣旨目的を再確認し、拡大組織して、恒久的な発展を期したいと存じます。

何卒、趣旨に御賛同の上、お一人でも多く御勧誘下され、御助力賜りますよう切にお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会会則（一部）

第一条 本会は、法然上人鑽仰会と称する。

第二条 本会は、本部を東京都千代田区飯田町一ノ二十一番地に置き、支部を各地に置く。

第三条 本会は、法然上人のみ教を現代に実践し、遺徳を鑽仰することを目的とする。

第四条 本会は、前条の目的を達成するため左の事業を行う。

一、月刊雑誌「浄土」の刊行

二、教化「トラクト」等の刊行

三、講演会、座談会等の開催

四、その他、本会の目的達成に必要な事業

第五条 本会の会員は、普通会员、維持会員及び特別会員とする。

2、普通会员は、年額六〇〇円の会費を納入し、「浄土」の配布を受ける。

3、維持会員は、年額三、〇〇〇円の会費を納入し、「浄土」及び本会刊行のトラクトの配布を受ける。

4、特別会員は、年額一〇、〇〇〇円の会費を納入し、会務を行う。

（以下略す）



三部經の再発見 (三)

須藤隆仙

三部經の制定

あるまじの在家仏教会から頼まれて、法然上人の教えを話しにいったことがあります。そのとき浄土の三部經が法然上人の制定になるものであることを話したら、ひじょうに驚いた人があって、「自分は真宗の信者だが、三部經が法然上人の制定されたもの、ということは今まで知らなかった。法然上人の偉大さを、いまさらながら考え直さずにはいられない」といわれたのであります。

真宗の方のなかで、法然上人の教えは新鸞聖人の教えより、未熟なもの、と思っている方がいまでもおるようです。これは真宗の学者や布教師のなかで、いまだにそのようなこ

とをいいふらす人がいるからですが、決して正しい信じ方ではありません。それはともかく、このあるまじの在家仏教会の人、も、じつのところ、法然上人の価値を、それほど高く評価していなかったようであります。

それが、三部經は法然上人が定められた、ときいたものから、全く驚いてしまい、法然上人とは、ずいぶん偉いお方だ、ということになったようであります。

確かに、元祖上人の偉大さは、いろいろありますが、その中で、『浄土三部經の制定』ということとは、もっとも尊ばれるべき偉大さであります。

三部經の立場

元祖上人が、いかなるお立場から、浄土の三部経を制定されたかというに、それは、正しく往生浄土の大法を明すもの、として、この三つを定められたものであることが、『選択集一』に記されております。往生浄土の大法とは、不完全きわまりない私が、完全無欠なる私へと開かれていくことで、それ故にこの経は、もつとも不完全な泥の凡夫のために説かれたお経なのであります。ために元祖上人も「お釈迦さまは放逸邪見・悪善煩惱の衆生のためにこの法を説かれたのだ」と教示しておられます（三部経釈）。

全くそのとおりで、お釈迦さまご自身も、「諸の衆生のためにこの経法を説く」といい（大經）、「淨除業障、生諸仏前（悪いさわりを除いて、価値高い浄土へ転換させていく）」の経を説くといい（觀經）、五濁惡世の「一切世間のため」にこの法を説く（阿彌陀經）といっておられるのであります。ために元曉（六一七）という新羅華嚴の学僧は『遊心安樂道』という書の中で「浄土宗の意は、もと凡夫のためにし、兼ねて聖人のためにす」といっているのであります。また念仏をたいへん誹謗した日蓮聖人なども「末法の機にあいかないたる念仏」といって、念仏が末法相應、これからの世にますます必要のものであることを認めてしまっているのであります（本尊問答鈔）。

私が泥の凡夫であればこそ、浄土の三部経は、ますます私にもつとも必要のものとなってしまおうのであります。

三部経の伝統

もつとも元祖上人が三部経を選ばれたのは、全くの独断や、単なる思いつきでなかったことは勿論であります。『阿彌陀經釈』という漢文の著述のなかで、上人は、浄土の三部経を知ったのは、善導大師の觀經疏、天台大師の浄土十疑論、慈恩大師の西方要決、迦才という高僧の浄土論、恵心僧都の往生要集、その外、智景という人の書物などによるものである、と述べておられます。

そしてまた、無量寿經、觀無量寿經、阿彌陀經、の三つが正依の經典である、ということとは、伝統的な浄土祖師の思想でもあったようであります。天親菩薩の往生論は正しくは『無量寿經優婆塞舍願生偈』といいますが、この題名の「無量寿經」は、単に大經のみを指すものでなく、觀經・小經も含めた浄土三部経を指すものであるといわれ、ために往生論は、別名『三部経集義論』『三經通申論』などとも呼ばれているのであります。また曇鸞大師は往生論註の中で「釈迦牟尼仏、王舍城および舍衛國にましまして、大衆の中において無量寿仏の莊嚴功德を説きたもうに」といっておられます

が、王舎城は大經と觀經の説かれたところで、舍衛国は小經の説かれたところで、これは三部經のことをいっているのです。善導大師は觀經疏散善義の中で読誦正行を明すのに、三部經のみを上げておられます。

このように三部經を根本正依の經典と見ることは、伝統的な淨土祖師の思想であります。元祖上人はこの伝統を尊ばれ、さらにその上に積尊の御意を体し、弥陀如来のお導きを頂いて、三部經こそ淨土正依の經と明確に定められたのであって、その制定は全く元祖上人独自の信仰によるものでこそあったが、その存立は永い伝統を尊ばれた上に可能とされていったのであります。

三部經の流布

ある学者は、日本人にもっとも多く影響を与えている仏教經典は、無量壽經と法華經である、といっております。信仰の面からいっても、念仏と題目は、たしかに日本仏教の中の大きな流れと見ることができます。もっとも私の見解からすれば、『南無妙法蓮華經』という題目も、明かに念仏の中の一環であります。南無妙法蓮華經が南無阿彌陀仏とならなければ、法華信仰の窮極とはいわれないのであります。そのことはまたのちに詳述するとして、淨土經典の流伝を、私の住

む日本の国の上において眺めてみたいと思います。

伝説では、いまから千四百年もの昔、欽明天皇の十三年、百濟王が仏像と經卷とを日本へ献じたとき、その仏像が信州善光寺の本尊弥陀三尊で、經卷は淨土の三部經であった、と伝えているのであります。しかしこれは史実の根拠がないため単なる伝説の域より出ません。だが聖德太子の維摩經義疏という書物には「無量壽經に曰く」といって經文の一部が引用されているから、この頃(千三、四百年まえ)大經がすでに流布されていたことを知るのであります。また舒明天皇の十二年(六四〇)惠聰えそうという僧が宮中で大經を講説したのであります。惠聰は遣唐使小野妹子の一行に加って入唐した人で、三十一年間中国におり、帰国した翌年にまず第一に大經を宮中で講じたのであります。そして孝德天皇の白雉三年(六五二)にもやはり宮中で大經を講じております。そのときの聴衆沙門一千人と日本書紀は伝えております。日本書紀は価値深い史書ですから、この事実は信じてよく、とくにこれが、わが国宮中講經の初め、といわれているのであります。じつに日本で初めて宮中で講ぜられたお經は、淨土の無量壽經だったのであります。

つぎに觀經に関しては有名な当麻曇茶羅たまたんじらがあります。これは正月号の表紙に一部分が紹介され、鈴木成元君が解説をし

ておりますが、天平宝字七年（七六三）中將姫がハスの糸で
もって織ったと伝えられるものであります。そしてこれは、
観無量寿經の説くところを絵に現わしたものであって、『観
經曼荼羅』ともいわれております。中將姫の伝説はともか
く、学者の研究では、奈良時代のもので見て間違いない、と
いうことで、すでに千二百年もの昔に、観經がこのような形
で、人々の心の中に食い入っていたことを知るのであります。
またこの観經の信仰から彼岸の行事が出てきているの
も、有難いことであります。

阿弥陀經については元祖上人御自身つぎのように仰せにな
っております。

「阿弥陀經は、わが朝都鄙処々に多く流布せり。法華經と最
勝王經とは、諸宗の学徒兼學すべきよし、桓武天皇の御時
宣旨を下されて、定めおかれしかば、演說者として法華を解
說する師は多くなりたりけれども、暗誦する人なかりけれ
ば、法華を暗誦すべきよし、重ねて宣旨を下されけるの
ち、持經者多くいできたれり。法華はかように宣下により
てこそ流布せられたれ。阿弥陀經はその沙汰なけれども、
自然に流布して、処々の道場に、みな例時として毎日に必
ず阿弥陀經をよみ、一切の諸僧阿弥陀經をよまずというこ
となし。これひとえに浄土經有縁のいたすところ、ことの

おこりをたづぬれば、叡山の常行堂より出たり。かの常行
堂の念仏は、慈覺大師渡唐のとき將來したまえる勤行なり
とぞ」（勅伝二十四）
このようにして、浄土三部經が私の住む日本と、深い因縁
を見せてくれるところに、私もまたその中に育まれる幸せ
を、日々に感謝していくのであります

新規 会員

◇神奈川・田辺直太郎◇神奈川・大長寺◇神奈川・貞宗寺◇神奈川
・八木義徳◇千葉・大栗寺◇神奈川・岡本薫◇神奈川・滝本ヒサ

会 費 御 礼

昭和三十八年一月一日以後受領分

◇島根・中島龜二郎◇愛知・村瀬意吾◇埼玉・勝願寺◇長野・石川
清美◇岐阜・沢真勝◇長野・法樹院◇東京・戸松義順◇福井・善導
寺◇静岡・称養寺◇秋田・来迎寺◇奈良・松谷悦 ◇東京・青木榮
一◇福岡・実相寺◇京都・土井龍徹◇東京・朝貞晋◇広島・淨國寺
◇大阪・丘本正三◇宮城・笠原次郎◇青森・九尾定吉◇山形・松田
匡弘◇滋賀・入江くり◇三重・杉本善太郎◇和歌山・花井乗正◇秋
田・津村諦堂◇青森・玉泉寺◇千葉・西福寺◇静岡・法岸寺◇山口
・福田与七◇東京・飯田重男◇岩手・吉水祐光◇群馬・臼井清一◇
兵庫・光明会本部◇愛知・長善寺◇京都・小松真子◇静岡・藤田真
乗

（敬称略）

御法語をいただく

南無阿弥陀仏、往生の業には念仏を先とす。

(選択本願念仏集)

「選択本願念仏集」は浄土宗の指針であり、最も大切な聖典であります。その開巻最初の一句が、この御法語十四文字（漢文）であります。即ち上人は著作の最初に、南無阿弥陀

仏とまずしてお念仏を唱え、そして往生の業にはお念仏がすべてに先行すると申されました。古来この一句は有名であり、すべての人が有難くいただいてきました。

二祖鎮西上人は「往生極楽のためには、この南無阿弥陀仏の口称念仏を以て第一の行となす。この義を顯さんがための故に、註に往生の業には念仏を先と為すというなり」といわれました。また三祖記主禪師は「先となすというは前後をいうには非ず。往生の行の中に念仏は最要なり。故に先となすという」と申されました。しかし後に西山派では念仏を

その他の行と較べて先後をつけたのだとの説をたてました。この点につき石井教道先生は「永遠の生命に生きがために阿弥陀仏が一

切の万行から選択して凡夫へ与え給うた唯一の道であるから、念仏為先と註されたのである」と説明されています。

さて上人御自身のお詞を拝見しますと、恵心の往生要集に「往生の業には念仏を本となす」あり、同じく恵心の妙行業記に「往生の業には念仏を先となす」とあると、二通りの句のあることを引用されています。

恵心は往生要集の中で「三業の重恵は能く正道を障ふ。故に須らく之を護るべし。往生の業には念仏を本となす」といわれました。

これは往生のために最も大切なもの、根本となるものが念仏であるといった言葉です。また同じ往生要集の末尾の方では「往生の業には念仏を最となす」といわれています。これは諸行の中で何が勝れ、また何が劣っているかというとな念仏が最勝であるとの意味であります。このように恵心は「念仏を本となす」「念仏を最となす」「念仏を先となす」と三通りの句を用いています。

この御法語は恵心の言葉を用いたものであるとされています。なるほど三通りの句の中に同じ句があるので、こう解釈されてきたの

も当然のことです。

しかし言葉は恵心と同じ言葉が使われましたが意味が違っていると思います。恵心の言葉は念仏が根本であり、最勝であり、先頭にたつと、時によってどれでもよいのですが、上人のお詞は、念仏が一切のものに先行するのだという意味であります。

何故なら念仏行者は、自分が愚鈍の身であり、罪深いものなどの徹底した反省の上に立っているのです。この自意識のない者ならあえてお念仏を申さなくてもよいわけです。

上人の御決意の一端は「我もし人身をうけば、大愚痴の身となり、念仏勤行の人たらん」の一句によくうかがえます。従って上人の申されるお念仏は、これが大切な根本であるからとか、または万行に勝れているからとかの程度で申されたのでありません。人間としては深刻な反省をもつことが不可欠条件となされた上人は、人間が生きてゆくために必要なもの、即ちすべてに先行するのがお念仏であるとされました。そこには比較されるべき対象は何ものもあり得ませんでした。

(村瀬秀雄)

日本一の生産・設備

梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響理學博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展 芸術院賞受賞 事香取正彦先生



鋳物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 040 8847番 本社工場 高岡市横田

編集後記

▽国際的には両陣営の対立一方国内においては、社会の混乱、とくに、宗教界のそれはなほだしい。既成宗教の沈滞と新宗教の興隆とは、我々に深い反省と力強い団結を要求させしめるものである。二十八年前の法然上人鎮仰会結成當時も現代と大同小異の社会、宗教事情であつたといつても間違いない。

▽ここに、強固な浄土宗教団を組織づける一運動として、法然上人鎮仰会の、いわば、再結成運動が幕を切られた。会員の皆様には、これ迄以上の御協力をお願い申し上げると共に、旧会員は自動的に入会していただく事を御了承下さい(博)

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一カ年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 四月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十八年三月廿五日 印刷

昭和三十八年四月一日 発行

定価 五十円

編集兼 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

発行所 法然上人鎮仰会

東京都千代田区飯田町一ノ廿二

電話東京三三二五九四四番

損害東京八二一七番

2年で10万円!

3年で10万円!

わけなく貯まる10万円!



● 10万円のイージー積立

三菱の10万円プラン



三菱銀行

鎌倉支店

国電鎌倉駅表口